

「ドラッグ」経験者のライフヒストリー（1）

— ワーキングホリデーの若者たち —

白 松 賢

（学校教育講座）

（平成17年6月3日受理）

Life History of Working Holiday Youth with Experience in contact with "Drug" Culture in Australia

Satoshi, Shiramatsu

I. 問題設定

本稿の目的は、「ドラッグ」経験者（海外における「ドラッグ」カルチャーへの接触経験をドラッグ経験者と呼ぶ）のライフヒストリー分析をもとに、薬物問題の新たな側面を記述＝解釈することを目的としている¹⁾。また本稿で「ドラッグ」と括弧つきで表現しているのは、薬物乱用防止教育で問題とされる嗜好性薬物を意味しており、「ドラッグ」のクレーム申し立て活動において規範言説の対象となっている「状態のカテゴリー」（Ibarra and Kitsuse 1993=2000）であることを示す²⁾。

薬物乱用防止対策の一つである薬物乱用防止五か年戦略及び新五か年戦略は、薬物の取締の強化や若者達を取り巻く社会環境の改善とともに、学校における薬物乱用防止に関する指導の充実を図るとして薬物乱用防止教育や啓発教育に力を入れている。そして現在の薬物乱用防止教育や啓発活動は、「ドラッグ」の危険性への若者達の無知が興味・関心を生み出していることを前提に行われ、「ドラッグの怖さ」を身体的・精神的・社会的危険性の観点で強調するアプローチをとっている。

しかしながら薬物乱用防止教育や啓発活動は、すでに学校やメディアを通して多くの若者達に浸透しており、「ドラッグ＝怖い」というイメージが確立されてきている。例えば、それは総務庁（現在は総務省）青少年対策本部の調査結果（1997年）にも表れている。総務庁青少年対策本部が1997年9月に中学生及び高校生を対象に行った調査の結果では、薬物に対する健康意識の項目で、「健康に害があるから絶対にいけないことだと思う」と答えた生徒は、「シンナー遊び」（94.6%）、「大麻」（95.2%）、「覚せい剤」（95.3%）であり、ほとんどの中高生が「ドラッグ＝健康に悪い」という＜語り＞を了解している。

にも関わらず、若者たちの薬物乱用は依然として存在し、規範言説の中では「深刻化している」と語られている。この状況が薬物乱用防止対策の課題を示していること、すなわち危険のレトリックと没理性のレトリックに傾斜している薬物乱用防止アプローチに課題が存在していることを、脱法ドラッグユーザーへのフィールドワークから指摘してきた（白松2003、2004）。

こういった中で新たな教育方法として、現在の学校教育における薬物乱用防止教室で取り組まれているものには、ソーシャルスキルの育成アプローチがある。このアプローチの主眼はソーシャルスキルとして「＜NO＞という断る方法の体得」にある³⁾。このアプローチには、薬物乱用の原因として「＜NO＞と言えない状況」と「＜NO＞という技術のなさ」が設定されている。もちろん、「若者が危険性を了解しているのに薬物を使用している」という前提に立てば、一つの重要な教育方法であることに違いない。しかしながら脱法ドラッグのフィールドワークにおいて、薬物に無理矢理引き込むように勧誘されたり、強要されたという＜語り＞は稀であった。とするならば、若者たちは「ドラッグ」カルチャーにどのように接触し、どのような解釈過程を有しているのだろうか？

そこで本稿では調査対象を脱法ドラッグユーザーから拡張し、海外における「ドラッグ」カルチャー接触経験者へのインタビューとフィールドワークを行い、身近に「ドラッグ」が存在する文脈での「ドラッグ」カルチャー接触経験の解釈過程を明らかにし、そこから薬物乱用防止教育の新たな方法的課題に迫りたい。

II. 調査の方法と対象

本論文は、①オーストラリアのサーファーズパラダイスで行った2003年調査のデータ、②サーファーズパラダイス及びシドニーで行った2004年調査のデータを主としながら、③脱法ドラッグユーザーのフィールドワークデータを踏まえて分析を行う。

オーストラリアにおける調査は以下のような手続きをとっている⁴⁾。本調査では、ワーキングホリデーや留学でオーストラリアに渡航している日本人の若者たちの生活を中心としたインタビューやフィールドワークを行った。なおインタビュー協力者には偏りが生じないように、主として三つの方法で協力者を得た。

第一は街中でワーキングホリデーと思われる若者に声をかけ、インタビュー協力者を得た。第二はワーキングホリデーのエージェントに頼んで、協力者を紹介してもらった。第三は協力者から知人や友人を紹介してもらった。このインタビュー協力者を集める過程で、語学を目的として来ている者、サーフィンを目的に来ている者、ラウンド（オーストラリア国内を旅行すること）を目的に来ている者、ダイビングを目的に来ている者、人生経験を積むことを目的に来ている者、といった視点で多様性が生じるようにインタビューの協力者を得るように努力した。

その結果、2003年度調査では13名のワーキングホリデー（及びその経験者）のインタビュー協力者を得、2004年調査では12名のワーキングホリデー（及びその経験者）のインタビュー協力者を得、一人に対して60分～90分のインタビューを行った。2003年調査ではインタビューやフィールドワークの中でドラッグに話が及んだ時に質問する、という構造をとり、2004年調査ではドラッグに焦点化した質問項目も設定し、半構造化インタビューを行っている。また数人にはインタビュー外でもサーファーズのワーホリライフへのフィールドワークを許可してもらい、彼ら彼女らの生活に同行しながら調査を行った。

本論文では上記のインタビュー協力者の中でも主として「ドラッグ」カルチャーへの接触経験者のデータを中心とする。ここでいう接触経験者は現使用者ではないことを、あらためて強調しておきたい。というのも使用者への調査は問題を孕むこともあり、本研究では「身近で

ドラッグについて見聞きしたり、誘われたりしたことがある」「かつてドラッグの使用経験があるが現在は使用していない」という者のみに調査対象は限定している。すなわち、「ドラッグ経験者」というカテゴリーは現段階での使用者を含んでいないことを意味する。

III. 「ドラッグ」へのアクセシビリティ

オーストラリアのサーファーズパラダイスの選択は、予備調査において第一にワーキングホリデーの日本人が多く集まっているエリアであること、第二に「ドラッグ」カルチャーへの接触が容易であることから着目した。このエリアが「ドラッグ」カルチャーへのアクセシビリティの高い地域であることを示すように、調査の初期から以下のような語り>に出会った。

紹介されたエージェントのショーイチさんへ、「ドラッグカルチャーに接触経験のあるワーホリ（ワーキングホリデーの若者の略称）の子っていますかね？」と質問した際に、「こちら辺で、石投げたら、そういう子にいっぱいあまりますよ。たいていの若い子がそうでしょうね。サーファーズにはいっぱいいますよ」と笑う。

(2003/12/16/フィールドノーツ)

この「ドラッグ」へのアクセシビリティの高さは若者たちへのインタビューでも語られる。サーフィンメインと仕事上での社会体験を積みながら生活を楽しむために来たレイジは悪いこともいろいろやってきたというが、その彼もサーファーズではマリファナの開放的な使用に驚きを感じたと言う。

白松「こっちきてハマったこととあってある？」

レイジ「こっちきてハマったことですか？」

白松「日本ではあまりしたことがなかったってのは？」

レイジ「うーん。そんなないですね。日本では一通りやってたんで、悪いこともいいことも。別にそんな、こっち来て驚きもないですし。まあ、こんなもんなあ、みないな。... あー、でも、マリファナってのが、バッパー（注 バックパッカー用の安い宿泊施設）とかで、外人（注 外国人）とかがふつうに吸ってるのが**びっくりした**。ああ、ふつうに吸ってるみたいなの（笑）」

白松「公共の場で？」

レイジ「公共の場で。ふつう日本だと友だち同士で家の中でこっそりってイメージなんですよ。ふつうに、みんながいる前で吸ってるんですよ、あはあー、みたいな（笑）。つかまらないのー？みたいな（笑）。」

白松「その辺はやっぱりちょっと違うのかな？」

レイジ「でもやっぱり、こっちは違法だし、捕まるらしいんですけど。多いですよ。この前も店の人たちと、みんなでナイトクラブ行ったんですよ。で、ビリヤードやって。となりの台の人が吸い出しちゃって、すごい充実したんですよ、匂いが。で、セキュリティとかがやってきて、うちらまで疑われちゃって。違う違う、俺らタバコ吸ってるからって（笑）」

（2003/12/18 レイジ）

多くのワーホリたちも、バッパー、サーフィンやボディボードのビーチカルチャーやクラブカルチャーにおいては「ドラッグ」への接触機会が多いと語る。レイジだけではなく、クラブでの売人や「ドラッグ」ユーザーとの接触経験を語る者は多い。

「ここのクラブがノリスケさんとかと来るとこなんですよ」と説明を受けながら、ヨシキと街を歩いていると、そのクラブの横にあるハーブショップを指さしながら、「クラブの横に、どうどうとこんなショップがあるくらいですからね。クラブの中でもよく売ってますよ」と中を指さす。一緒に中を覗いてみると、様々なハーブ（脱法ドラッグ）、ボングやパイプ（マリファナの吸引器）が棚に並んでいた。「クラブの中では、ハッピーなん？」と聞くと、「エクスタシーとか、いろいろですね。」とヨシキはストリートを歩き出した。

（2004年12月フィールドノーツ）

語学習得を目的に留学後ワーホリで再度渡豪したゴウヤソノは「ドラッグ」に関心を全く持っていない。けれどもサーフィンをするゴウは「しょっちゅう誘われる」と言い、「サーファーの男の子たちはほとんどマリファナをしてる。女の子もシェアメイト（注 ルームメイト）がしているから、結構してる」とソノが言うように、サーフィンやクラブカルチャーに付随するものとして「ド

ラッグ」カルチャーが言及される。

さらにサーファーズ近郊には、ニンビンという有名なヒッピータウン（車で2時間から3時間程度の場所に位置するという）があり、そこでは「多くのマリファナ（ガンジャ）の売人が声をかけてきますよ」（シン、ダイ、ノリスケ、ヨシキ等々）、「実際にニンビンでも違法らしいんですけど、そこら辺で吸ったり、売ったりしてますからね」（カズト）と、マリファナに寛容なオーストラリアの象徴として語る。

IV. <問題化されない経験>

としての「ドラッグ」

1. 彼ら彼女らの生活における問題経験

多くの若者達が「ドラッグ」カルチャーへの接触経験を語る一方で、「こっちの生活でトラブルとかに巻き込まれたことない？」「こっちの生活や人間関係上、困ったことや厄介なことって何かある？」という質問に対して、「ドラッグ」の問題は全く言及されない。むしろ彼ら彼女らの生活上のトラブル（困りごとや厄介ごと）として語られることは、「シェアメイトとの関係」、「盗難」や「車の故障や売買」についてであった。

とりわけ多く言及されるトラブル（困りごとや厄介ごと）の一つが、「シェアメイト」や「不動産の賃貸契約」に関するものである。

サーファーズパラダイスの多くのマンションや貸し家はウィークリー・レントとして週毎に部屋代を支払う契約であるものの、その賃貸契約には半年から1年以上という長期期間の契約が求められる。ところがワーホリの若者たちの生活には、ラウンド（オーストラリアの各地を転々と回ること）やピッキング（バッパー等に泊まりこみ農作業アルバイト）があり、その契約が困難な者もたくさんいる。そのため、オーナーシップとして自らが賃貸契約を結ぶのではなく、賃貸契約を他者から譲り受けたり、賃貸契約を結んでいる者にレント料（部屋代）を払い、シェアルームやシェアハウスとして利用し、生活をしている。例えばオーナーとしてレント料で暮らしているダイの家には、一部屋に二人から三人がシェアルームし、ラウンドをしている者を泊める場所としてガレージでもレント料をとっている。「ラウンドしてる途中なんで、安く泊まれるところがあってありがたいんすけ

どね」というコースケはレント料を払ってそのガレージに短期間滞在していた。

しかしながらこの生活スタイルは、金銭や心情的な行き違いから問題化されやすい。例えば、ワーホリ後ビジネスビザを取得し、数年サーファーズに住んでいるカズトはシェアハウスのオーナー経験やシェアメイト時代の経験から、以下のように語る。

「オーナーやってて『もうちょっと安くしてくれ。』『いやー安くできないでしょ。これが折半だから。この値段でこの折半でやってるんだからできないでしょ。』『じゃー出ていくー』って言うんですよ。『じゃ出てけよー。』っていう風になるじゃないですか？（笑）うーん、そういうのとかね、『遠いから車賃してくれー。』とかそういうの？なんっていうんすかね、やっぱ人間どこもそうなんでしょうけどワガママになっていく？何かを持ってるのとそれに遠慮しなくなってくるっていうか。ま、学校行ってる頃はそうなんですけど、僕が車買ったのが来て2ヶ月目で、買ってまだ学校行ってる時に買って。で、ブロードビーチの学校だったんで、学校どどん新しい子入ってくるじゃないですか？毎週。それでもうサーファーズ連れてってくれ、サーファーズ連れてってってくれて。もうホント毎日のように言われて。いやあ、そういうので、だんだん、だんだん悩んできたりとか。なんか使われてるだけ、アシですよ？要するに、そういうのもありましてね。で、シェアでもそういうのがあって。やっぱり料理作れるからもう『料理は作れよー。』『じゃ作るよー。』パーティ行ったら『おら作れよー』・・ねえ、別にそれが最初のうちは楽しかったですよ、やっぱ。それが当たり前になってくると、うん、どうかなって。で、シェアとかしてても日本人7人とかで僕シェアしてたんで、リビングで寝てた時とかも、ねーごはん、ごはん、ごはん、コーヒーとかって・・で洗濯物とか女の子の下着とかもほしてたんですよ（笑）いや、僕はイジメられてたとかじゃなくて、みんなで作ってたんですけど、いやあ、でもねー」（2003/12/18 カズト）

また「盗難」も多くのワーホリたちが語る＜問題経験＞の一つである。

「バッパーはほんとにもう、誰かが出てくっていう日

あるじゃないですか？そういう日には必ず誰かの何かがなくなるんですよ。だから出てく人は必ず取ってくんですよ。で、名前を書いて冷蔵庫に入れといてもなくなってるんですよ。食べ物とかも。私はパスポートとお財布は必ずウエストポーチでこうやって巻いて布団かけて寝てました。それ位危険。ウエストスーツ、サーフボード、当たり前誰かのと変わってますからね〜。」

(2003/12/17 リエ)

他にも、1000ドル盗まれて「仲良かった日本人のワーホリが怪しい」と語るシンや「バッパーで2万円盗られた」と語るレイジなど、バッパーや自分の借りている部屋で盗難にあった経験は多く語られる。

金銭に関するトラブルを問題経験化する＜語り＞は、彼ら彼女らの生活にとって金銭が最も重要な事柄であることと関わっている。「ワーホリは金がないっすからね」とテツハルの言うようにバイト代を稼ぎながら旅をしたり、サーフィンやクラブに行ったりしつつも、多くのワーホリたちがお金をかけないように生活をしている中で生じるトラブルであるためである。

2. 「ドラッグ」カルチャー接触経験の＜語り＞

これまで、「ドラッグ」は身近な文化の一つとして語られながらも、問題経験として言及されないことを記述してきた。これには二つの含意がある。第一にワーホリの若者たちにとって、＜語り＞の中で問題経験として構成されるトピックは彼ら彼女らの生活と深く関わっており、彼ら彼女らの経験において「ドラッグ」が問題化されるとするならば、問題化する側との相互作用を通じて立ち現れることを意味している（Emerson and Messinger 1977）。第二に「ドラッグ」使用者の周囲にいる者にも、「ドラッグ」（及びその使用者）との関わりが問題経験化されない、ということである。

例えば、サーフィン目的で渡豪してきたリエは自分以外の多くがマリファナをしている状況に驚きを感じつつも、それを大きな問題として語るほどではないと言う。

白松「誘われたりはしないの？」

リエ「誘われたりはしますけどー。吸ってる人みんなをまきぞえにするとかそういうのじゃなくなってなんてい

うか・・・」

白松「吸いたい奴は吸えばっていう感じ？」
リエ「わりと。だからね、自分じゃないから勝手にしてれば？って。あまり気にしない。私が最初にこっちに来た時は私以外のみんな全員やってましたからねー。来たばっかりだったから噂では聞いてたんですよ。結構みんながしてるとかって。ほんとみんな吸ってるわーってびっくりしちゃって。」

白松「その後誘われたりはしなかった？」

リエ「あー、別に。なんともない。」

(2003/12/17 リエ)

彼ら彼女らの<語り>は、飲酒者と非飲酒者の酒を勧誘する相互作用と同じような<語り>を連想させる。

白松「こっちではハッパ吸ったりしてる子って」

ゴウ「あー、あー、いますね。」

白松「多いの？」

ゴウ「多いっすよ。」

白松「そういうのって誘われたりする？」

ゴウ「あー、しょっちゅうっすね。(笑)」

白松「するの？」

ゴウ「いやあ、興味ないっていうか。タバコも今やめてるんで。せっかくこっち来て、そんなことで病院行ったり、やっかいなことはしたくない。」

(2003/12/19 ゴウ)

白松「ワーホリでいた時、まわりの子たちって、結構やってた？」

ミヨ「いましたねえ。みんなやってたんじゃないかなあ。でもあたしは、あんまりそういうところに行かなかったから。サーフィンやっていると、朝早くて夜も早いから、だからワーホリの時は、ぜんっぜん、パーティとか行かなかったですよ。波乗り、バイト、で、また波乗り、みたいな。ぜんっぜん。」 (2004/12/20 ミヨ)

そのほかにも、2004年12月のフィールドワークの時点では、まわりに「ドラッグ」をしている人がいないと言っていたレイも、その後「私がファームで知り合った人達がもうみんなハッパ歴6、7年とかで、今私の周り

は毎日ハッパ祭りばりに吸ってるんですよ。ディーラーの友達もこないだ警察捕まって逃げてますけど。私は輪の中にはいるけど一回も手は出してないです。」という経験を持つ。

彼ら彼女らにはマリファナやスピードをするメンバーとの関わりを持った場合、実際に誘われたり、周囲のメンバーが「ドラッグ」を使用している状況にいながらも、本人は使用せずに人間関係を維持している経験が語られる。すなわち「ドラッグ」は彼ら彼女らのライフヒストリーにおいて、<困り事ややっかいごとではない>という経験が<語り>の中で再構成されている。

これはまた「ドラッグ」ユーザーと非ユーザーとの「儀礼的無関心」という相互作用^{やりとり}を示してる。脱法ドラッグユーザーのフィールドワークにおいて、マジックマッシュルーム⁵⁾を仲間内のメンバーに広めたコージロウの<語り>からも理解されよう。

白松「友達に紹介してるやん。そういった時に、不安があったりはせん？やろやろ、みたいな感じ？」

コージロウ「いや、最初は不安がりますね、やっぱり」

白松「それはどうやって言った？」

コージロウ「無理矢理薦めん時点で、やっぱ信用してもらえたから、うん。あとは今までに、どこどこ、どの映画がおもしろいから一緒に行こうやあ、つってホントおもしろかったりとか。そういうのの積み重ねで...
無理矢理には、食わせてないから。やりたかったら、一緒にやるって？」 (2001/7/3 コージロウ)

彼ら彼女らはメンバー内の相互作用^{やりとり}において、「無理矢理」ではなく、メンバーの関心に応じて勧誘をするという関わりを有している。すなわち非ユーザーにとっては「ドラッグ」使用への「儀礼的無関心」を用いた相互作用^{やりとり}によって、ユーザーにとっては「ドラッグ」の執拗な勧誘に対する「儀礼的無関心」を用いた相互作用^{やりとり}によって、ユーザー/非ユーザーを問わず、勧誘場面において、「ドラッグ」を問題経験化する<語り>が立ち現れてこない。

V. 考察と課題

本稿では若者たちの身近にある「ドラッグ」カルチャ

への接触経験と「ドラッグ」への勧誘に着目し、「ドラッグ」が問題経験化されない〈語り〉を記述してきた。ここで誤解のないように指摘すると、本稿は「ドラッグ」に問題があるかないか、について実証することを目的としているものではなく、「ドラッグ」経験者の〈語り〉に着目し、現在の薬物乱用防止教育に潜む課題にアプローチしている。

これまでの「ドラッグ」経験者が経験を再構成する〈語り〉、すなわちライフヒストリー分析から、第一に「ドラッグ」ユーザーの〈閉鎖的な逸脱集団〉の相互作用においてではなく、非ユーザーとユーザーが共生する〈ゆるやかな人間関係〉での相互作用の経験を構成する〈語り〉が明らかになった。

第二に「ドラッグ」の勧誘を巡る相互作用が「儀礼的無関心」という〈問題化されない経験〉として構成されることを明らかにした。「人々の日常の出会いにおいてやたらと攻撃的態度や非協力的態度を示すことは、相互作用を混乱させるだけで、トラブルメーカーの誘いを受ける」と宝月（2004年、51頁）が指摘するように、「ドラッグ」を問題化する相互作用ではなく、その場を問題化せずにやり過ごす関わり、すなわち「儀礼的無関心」による相互作用が語られていた。

このように彼ら彼女らの「ドラッグ」経験の〈語り〉は、薬物乱用防止教育におけるソーシャルスキルアプローチに新たな視点を提示する。

薬物乱用防止教育では、「ドラッグ」ユーザーの「閉鎖的な逸脱集団」の相互作用と「ドラッグの強制的勧誘」が前提として設定されている問題を指摘できよう。これまで見てきたように、「ドラッグ」を拒絶する非ユーザーに寛容なユーザーの相互作用が存在し、多様な場面を想定したアプローチが必要である。「閉鎖的な逸脱集団イメージ」や「ドラッグの強制的勧誘」にソーシャルスキル育成アプローチを一元化したり、過度に強調したりすることは、異なる文脈で「ドラッグ」経験に直面した場合、新たにローカルな物語を創出し、場合によっては〈語り〉のもつ信頼性を損なうことにもなりかねない。

一方で彼ら彼女らの生活における「当事者の問題解決」の臨床例として、実践を方法化することも可能であろう。具体的には、「儀礼的無関心」で対応し、相互作用上の

新たな問題を生み出さないような方法や状況の存在、すなわち当事者の経験の多義性と多様性を包含したアプローチに改善していく必要がある。

この「ゆるやかな人間関係」と「儀礼的無関心」という関わり方は、「ドラッグ」カルチャーにおけるユーザーと非ユーザーの共生、すなわち「ドラッグ」ユーザーの言説に非ユーザーが触れ続けることを可能とする。そのため、「ドラッグ」を断れない関係のみならず、「ドラッグ」を断れながらも共生し続ける関係がどのような問題を孕んでいるのか、という新たな問いをたてる必要がある。

本稿では、「ドラッグ」カルチャーへの接触経験や「ドラッグ勧誘場面」について経験を再構成する〈語り〉をもとに、ソーシャルスキル育成アプローチの持つ方法的課題を示してきた。もちろん、ソーシャルスキル育成アプローチが無意味であるという意味ではなく、若者たちの生活世界にある多義性と多様性にも着目しながら、そのアプローチを拡張し、再構築する視点を意味している。今後、さらにデータを詳細に分析しながら、方法的な検討を行っていきたい。

本研究は、平成15～17年度文部科学省科学研究費補助金（若手研究（B））の助成を受けて行った研究成果の一部を報告するものである。

註

- 1) ただし本研究は三年計画の二年目であり、中間報告としての位置づけであることを付記しておきたい。
- 2) 調査対象の中には、「ドラッグ」とマリファナを明確に分類して語る者、「ドラッグ」としてマリファナを語る者、など様々なカテゴリー化が用いられる。しかしながら「ドラッグ」をめぐるカテゴリー化の詳細な分析は本稿の目的ではないので割愛している。このカテゴリー化の問題については、拙稿2004において「ドラッグ」をめぐる公共の文化（言説やその言語的資源によって構築されるイメージ）がそれぞれ使用者の独自の^{フォークロア}伝承と結びついてローカルな文化を産出するプロセスを描いている。
- 3) 薬物乱用防止教育指導者用ビデオ（平成13年 日本学校保健会）『育てたい生きる力 喫煙、飲酒、薬物

乱用防止のために』。

4) 脱法ドラッグユーザーのフィールドワークの報告は、白松2004を参照されたい。

5) コージロウらへの調査を行っていた当時、マジックマッシュルームは合法ドラッグとして流通していたが、「麻薬、向精神薬及び麻薬向精神薬原料を指定する政令の一部を改正する政令」（2002年5月7日付）が公布され、サイロシピン及びサイロシンを含有するきのこ類（いわゆるマジックマッシュルーム）は、2002年6月6日より麻薬原料植物として法的に規制されるようになった。

引用及び主要参考文献

Becker, Howard S 1963, *Outsiders : Studies in the Sociology of Deviance*, The Free Press, (= [1978] 1993, 村上直之訳、『アウトサイダーズ』（新装版）、新泉社）。

Clifford, James and George E, Marcus 1986, *Writing Culture : the Poetics and Politics of Ethnography*, University of California Press, Ltd, (=1996 春日直樹・足羽与志子・橋本和也・多和田裕司・西川麦子・和邇悦子訳、『文化を書く』、紀伊國屋書店）。

Emerson, Robert M and Sheldon L, Messinger 1977, "The Micro-Politics of Trouble", *Social Problems*, Vol.25, No.2, pp.121-134.

Emerson, Robert M, Fretz, Rachel I and Linda L, Shaw 1995, *Writing Ethnographic Fieldnotes*, The University of Chicago, (=1998 佐藤郁哉・好井裕明・山田富秋訳、『方法としてのフィールドノート』、新曜社）。

Gubrium, Jaber F and James A, Holstein 1990, *What Is Family?*, Mayfield Publishing Company, (=1997 中河伸俊・湯川純幸・鮎川潤訳 『家族とは何か ―その言説と現実』、新曜社）。

Gubrium, Jaber F 1993, "For a Cautious Naturalism", Holstein, James A and Gale, Miller, *Reconsidering Social Constructionism*, Hawthorne, NY:Aldine de Gruyter, pp.89-101.

Holstein, James A and Gale, Miller 1993, "Reconstituting the Constructionist Program", Holstein, James A and

Gale, Miller, *Reconsidering Social Constructionism*, Hawthorne, NY:Aldine de Gruyter, pp.241-250, (=2000 鮎川潤訳、「構築主義プログラムの再構成」、平英美・中河伸俊編『構築主義の社会学』、世界思想社、105-121頁）。

宝月誠2004 『逸脱とコントロールの社会学 ―社会病理学を超えて―』、有斐閣。

Ibarra, Peter R and John I, Kitsuse 1993, "Vernacular Constituents of Moral Discourse: An Interactionist Proposal for the Study of Social Problems", Holstein, James A and Gale, Miller, *Reconsidering Social Constructionism*, Hawthorne, NY:Aldine de Gruyter, pp.25-58, (=2000 中河伸俊訳、「道徳的ディスコースの日常言語的な構成要素」、平英美・中河伸俊編『構築主義の社会学』、世界思想社、46-104頁）。

北澤毅 1990、「逸脱論の視角」『教育社会学研究』、第47集、37-53頁。

北澤毅・片桐隆嗣 2002、『少年犯罪の社会的構築 ―「山形マッド死事件」迷宮の構図』、東洋館出版社。

古賀正義 2001、『＜教えること＞のエスノグラフィー』、金子書房。

Maanen, John V 1988, *Tales of the Field: on Writing Ethnography*, The University of Chicago, (=1999 森川涉訳、『フィールドワークの物語』、現代書館）。

中河伸俊 1998、「レイベリングからトラブルの自然史へ」、山田富秋・好井裕明編『エスノメソドロジーの想像力』、せりか書房、105-120頁。

中河伸俊 1999、『社会問題の社会学―構築主義アプローチの新展開』、世界思想社。

Pollner, Melvin 1987, *Mundane Reason*, Cambridge University Press.

Sacks, Harvey 1979, "Hotrodder : A Revolutionary Category" in Psathas, George ed, *Everyday Language : Studies in Ethnomethodology*, Irvington Publisher, pp.23-53, (=1987, 山田富秋他訳、「ホットロッダー―革命的カテゴリー」、山田富秋・好井裕明・山崎敬一編訳『エスノメソドロジー』、せりか書房、19-37頁）。

酒井朗 2000、「『逸脱』の社会学・入門」、菊谷剛彦・濱名陽子・木村涼子・酒井朗『教育の社会学―＜常識＞の問い方、見直し方』、有斐閣アルマ、54-71頁。

- 佐藤郁哉 1984、『暴走族のエスノグラフィー』、新曜社。
- 白松賢 2003 「脱法ドラッグ・ユーザーのライフストーリー ―ある機会的使用者に着目して―」『愛媛大学教育学部紀要』第Ⅰ部（教育科学）、31-41頁。
- 白松賢 2004 「マジックマッシュルームとは何か？ ―公共の言説とせめぎあう使用者の経験―」『教育社会学研究』第74集、189-207頁。
- Spector, Malcolm and John I, Kitsuse [1977]1987, *Constructing Social Problems*, Hawthorne, NY:Aldine de Gruyter, (=1990、村上直之・中河伸俊・鮎川潤・森俊太訳『社会問題の構築』、マルジュ社)。
- 杉浦郁子 2000、「『ライフストーリーを記述する』実践を記述する」、好井裕明・桜井厚編『フィールドワークの経験』、せりか書房、133-144頁。
- Sutherland,E.H. and D R, Cressey 1960 (6th edition) , *Principles of Criminology*, J. B. Lippincott Company (平野龍一・所一彦訳『犯罪の原因』有信堂、1964)